

13. 筋骨格系および結合組織の疾患 (M7979)

文献

伊藤和憲、内藤由規. 線維筋痛症患者に対する顔面刺激(ローラー鍼)の有効性について. *慢性疼痛* 2015; 34(1): 164-169. 医中誌 Web ID: 2016310491

1. 目的

線維筋痛症患者に家庭での顔面ローラー刺激を取り入れることで、痛みや QOL にどのような影響があるのかについて検討。

2. 研究デザイン

ランダム化比較試験 (RCT)

3. セッティング

明治国際医療大学附属鍼灸センター、京都、日本

4. 参加者

6 ヶ月以上継続的な痛みが存在する線維筋痛症患者 12 名。

5. 介入

Arm 1: ローラー鍼群 (先端直径 0.05 mm・高さ 0.5 mm の突起(シリコン製ポリエステル樹脂)が 1 cm 角におよそ 400 本存在しているシートがローラー状に巻き付いており、体調に応じて顔面部位を刺激)

Arm 2: Sham 群 (ローラー鍼と同じ形状だが突起が存在しないものを同様に使用) いずれも従来の鍼灸治療 (1~2 週に 1 回) に加えて実施。

6. 主な評価項目

介入前と介入 1 ヶ月後に、痛みの主観的な強さを Visual Analog Scale (VAS) で、線維筋痛症に伴う QOL 変化を Japanese Fibromyalgia Impact Questionnaire (JFIQ) で、うつ状態を Beck Depression Inventory-Second Edition (BDI-II) で評価。

7. 主な結果

ローラー鍼群 6 名 (43.8 歳±14.7)、sham 群 6 名 (45.3 歳±15.3)。介入前と介入 1 ヶ月後で、痛み VAS は、ローラー鍼群 53.8±17.5→31.3±11.7、sham 群 54.7±25.4→60.2±15.1、変化率に有意な群間差あり。JFIQ は、ローラー鍼群 52.0±22.3→39.7±20.7、sham 群 52.7±15.5→57.4±13.1、変化率に有意な群間差あり。BDI-II は、ローラー鍼群 15.7±6.2→9.7±6.1、sham 群 16.2±6.4→13.8±5.4、変化率に有意差なし。

8. 結論・意義

痛みや QOL の改善が認められたが、うつ状態には変化は認められなかった。線維筋痛症患者にローラー鍼を用いることは、痛みや QOL の改善など臨床的に有意義であると考えられた

9. 鍼灸医学的言及

ポリモーダル受容器が刺激されるような適度なローラー刺激 (触圧刺激) を顔面に与えることにより、中脳水道周囲灰白質や延髄の大縫線核、巨大細胞網様核などの部位が関与して下行性痛覚抑制系が賦活させることでオピオイドの量が増えた可能性。

10. 論文中の安全性評価

記載なし

11. Abstractor のコメント

線維筋痛症などの慢性疼痛患者が通院治療だけでなく自宅で行えるセルフケア手段を模索することは重要である。「患者の感想では、ローラー鍼群は触圧刺激の心地よい感覚があるが、sham 群では心地よさは殆どなかった」と記されていることから、sham 群の患者は必ずしもブラインドされていなかったのかもしれない。小規模の予備的試験でさらに至適な刺激量や刺激法を探った後、より規模の大きな RCT で臨床効果と安全性の確認をする必要がある。なお、本研究はローラー鍼メーカーの受託研究である。

12. Abstractor and date

山下 仁 2022.3.9